Case 2

海外からの移住者や観光客が多い地域でリアルなコミュニケーションができる英語を習得

白馬高校（長野・県立）

観光資源を学びに変える地域と共にある学校づくり

白馬高校のある白馬村は、スキーや登山で国内はもとより海外からも人気を集める国内有数の観光地だ。この地域の環境に魅力を感じて移住した外国人は村の人口の1割を占める。同校に国際観光科ができたのは2016年。背景には生徒数の減少があった。

白馬、小谷両村は「白馬高校を育てる懇話会」での議論を経て、県教育委員会に対し「白馬高校の経営・運営に参加する地域案」を提出。県教委の検討・審議の結果、全国から生徒を募集する国際観光科の新設が決まった。これに合わせて、長野県初となる学校運営協議会も設置され、県・県教委・地域が連携して学校の支援を行う、新生白馬高校が誕生した。

同校が目指すのは、「多様な文化や環境に触れ、地域への理解と愛着を深めるなかで、自身や地域の未来を創造できる生徒の育成」であり、観光と英語を軸としながら幅広い学びに取り組めるカリキュラムを意識しているという。「観光の専門科を置く学校は全国にありますが、そこでの学びは①ホテルなど観光業での実務を学ぶ、②観光事業のマネジメントや政策を学ぶ、③地域の観光資源やその魅力化について学ぶ、の3つに大別されます。本校ではどれも学べますが、主に目指すのは③で、地域を多角的かつ深く理解し、持続可能なまちづくりを考える取組を通して自己実現を図ることを狙っています」（国際観光科主任・浅井勝巳先生）

卒業後は大学へ進学する生徒が多く、学部も多岐にわたっている。

「全国から集まる生徒のための寮は村が出資・運営し、学校と協力して生徒支援にあたっています。授業や課外活動で地域の皆さんが講師や活動場所の提供等で積極的に支援くださることで教育活動の幅が広がり、生徒の育成にもつながっています」（藤森 要教頭）

地元の魅力を実践的に伝える英語ガイドツアー実習

国際観光科では、学校設定教科「観光」に、「北アルプス学」（1年）「観光実務」（2年）、「観光まちづくり」（3年）といった特色ある学校設定科目を置き、地域の特性、観光産業の仕組み、観光政策について学んでいる。英語でも地域環境を活かした多様な学校設定科目を設置している。

「英語でコミュニケーションを図りたいという生徒のニーズにあわせて、対話に力を入れた授業を展開しています」（浅井先生）

特徴的な科目が2年生の「観光英語」（旧課程「観光コミュニケーション英語」）だ。観光に特化した英語表現やホスピタリティについて実践的に学習する科目で、なかでも生徒による英語ガイドツアーが目玉となっている。

まず事前学習として、白馬地域で観光ガイドを務めている外国人ガイドを招いて、プロの仕事を体感。その後、生徒自らツアーの流れとガイドの内容を立案し、白馬・小谷在住の外国人をゲストに模擬ツアーガイドの実践に取り組む。ツアー中にはゲストから想定外の質問も出るが、仲間と協力してその場で調べて説明を乗り切っていく。

体験した生徒たちは、「会話の内容は理解して答えられたし、アイコンタクトもできたが、次はもっと表情を意識して会話を継続させたい」、「知っている単語を並べただけではゲストに伝わらないこともあった。文法もしっかり学びたい」など、気づいた課題を次の学びにつなげる意欲をみせている。

写真左から、国際観光科主任・浅井勝巳先生、藤森 要教頭

外部の人々との関わりでコミュニケーション意欲が高まる

英語ガイドツアーに限らず、白馬在住の外国人が学校の取組に協力してくれる場面は多い。また、バスターミナルやカフェを訪れた外国人にインタビューする活動も行っている。

「観光客の滞在期間を知るために、近隣のスキー場でアンケート実習をしました。対象は日本人観光客でも良かったのですが、生徒たちは果敢に外国人観光客に尋ねに行っていて、『外国人は短くても2週間、平均で1カ月も滞在している！』と、日本人観光客との違いに気づいて帰ってきました。コロナ禍で外部の人との交流が減ったことで、生徒たちも内向的になりつつあったので、人との関わりが生徒たちにとっていかに大事かを痛感しています」（浅井先

生）

コロナ禍で止まっていた語学研修や海外との交流が昨年度から再開。日本に居ながらにして英国風の雰囲気と英語コミュニケーションを満喫できる、福島県のブリティッシュヒルズでの語学研修は昨年6月に実施。今年は学校を訪れたシンガポールの高校生たちとSDGsについての話し合いやお互いの伝統文化について紹介し合う交流を行った。今年度末には希望者による海外短期研修も再開する予定だ。

学校の外に出ることで地域の想いを受けとめる

外部との交流を含む多様なカリキュラムを通して、生徒たちの進路選択の幅も広がっていく。海外で学んでみたいという生徒も増加傾向だともいう。

「実習などで触れ合う外国人定住者の皆さんが日本で仕事や生活をする姿を見て、自分も海外で活躍できるかもしれないという発想が広がっています。留学した先輩の体験談も役に立ちますが、それ以上に身近にいる外国人の方の話に実感がわくようです」（浅井先生）

生徒たちの学びを保障する地域の支えも強力だ。生徒たちの語学研修費用の一部（最大20万円）を補助する制度のほか、英語検定などの受験料補助の制度も充実している。さらには、同校での学びを将来、村に還元してくれることを期待し、大学卒業後Uターンして村内の観光関連の仕事に就いた場合に、大学等在学中に受けた奨学金を最大100万円補助する「白馬村ふるさと人材奨学金返還補助事業」を実施している。

「こうした手厚い事業があっても、生徒たちは初めから地域からの期待を意識しているわけではありません。ところが、学校から一歩出て、授業実習や課外活動で地域の皆さんと交流する機会を重ねることで、いかに白馬高校の生徒が地域から応援されているかを実感し、それによって地域への見方も変わっていきます。私たち教員は、そうした地域と生徒との橋渡し役としてこれからも活動を続けていきたいと思っています」（浅井先生）

＼ 英語ガイドツアーの取組 ／

【 事前学習 】

秋に実践する英語ガイドツアー実習に向けて、事前学習として日本で長期間活躍するプロの外国人観光ガイドを招き、英語ガイドの実際を学ぶ。

【 英語ガイドツアーの実践 】

現3年生が2年次に行った「観光コミュニケーション英語」の授業での様子。集合時から実践は始まりバス乗車中のガイドもこなす。

白馬発のオプショナルツアーの目的地として人気が高い、地獄谷野猿公苑と小布施、善光寺を回った。

ゲスト役からの予想外の鋭い質問にもその場で調べるなど、生徒たちは自分たちのできることを模索して対応していた。

ブリティッシュヒルズでの語学研修

希望者を対象に、福島の滞在型語学研修施設であるブリティッシュヒルズで、2泊3日で英語漬けの生活を送る。

座学での英語の授業のほかに、英語でレクチャーを受けながら実際にお菓子を作ってみるなど、体験型で楽しく学んだ。

シンガポールの高校生徒との交流

シンガポールのPeicai Secondary Schoolの生徒19名が今年の5月に来校。

体験交流では、グループに分かれて日本の伝統的な遊びであるけん玉やコマ、弓道、ボルダリングを一緒に体験。

白馬高校が2020年に実施した「断熱プロジェクト」をもとに、持続可能な環境に関して共に学んだ。

学校データ

1951年創立／普通科・国際観光科／生徒数136名（男子70名、女子66名）、多数のオリンピアンを輩出するスキー部を有し、国際観光科は日本全国から生徒が集まる。コミュニティ・スクールとして地域から多方面で篤い支援を受けている。